

三一、両 堂 村

1、両堂の由来 文化六年の風土記にみえるように、もと不動堂と太子堂が並んでいたので二堂村といつたらしい。寛文中今の大名に改めたとあるが、これは保科正之が来封し、寛文五年会津風土記を編さんする前後に、文字の適合しないような村の名を相当改めているから、その際に両堂となつたとみえる。

不動堂は現存しているのでわかるが、もう一つの太子堂は、両堂寺ともいい、太子を祭つていたので、そもそも呼んだらしい。本尊の背に延文二年（一三五七）檀主小松金家住人法心、妙円二人の名が書付けてあつたというから、南北朝時代で、北朝の年号を書いているところをみると、東北の北畠親房等を擁した一連たる勤王精神もうかがえ得るようにみえる。ここに真言の道場を開いていたようである。しかし、既に荒廃して久しく、延宝三年（一六七五）に正式に廃寺になつてゐる。その後に火災にあって太子の像を失つたのは惜しい。同時に不動の本尊も焼けたのではないかと思うが、そのことは記録にも、伝承にもみえない。

「会津旧事雜考に西堂寺を宝幢院と記す訛れり」とある宝幢院は、現在も古麻生にある如意山宝幢院のことである。これと誤記したらしい。村人は不動堂の西につづく庵が太子堂跡で、再建できないままになつてゐると語るから、西堂が古麻生まで離れるることは無理であるし、宝幢院に天子像を祭つたことのあるのも聞かない。

2、大聖不動明王 日本三所の不動明王ともい、今は新九月三日となつたが、もとは旧八月三日が不動様のおひちで、その前夜を宵びちといつてぎわつた。うたがい（うたかがい）の人々が集り、東の墓地のある河原に大きな梨の木があつたので、俗に梨の木河原と呼んでいたが、そこにかけあんどんをして老爺老婆が玄如節の歌のかけあいを楽しんだ。これは夜を徹してこもり堂でもつづいた。祭の当日は会津の念佛踊が、北方・南方